

織田作之助関係書簡を読む (三)

大阪府立中央図書館

小笠原 弘之	灘井 雅人
苗村 昌世	三島 美幸
八木 美恵	

はじめに

今回は、「織田文庫」第2期寄贈分より作家・宇野浩二差出の書簡1通を翻刻した。また前回に続き、大阪・楞嚴寺で行われた、織田作之助葬儀における杉山平一氏と小野十三郎氏の弔辞の翻刻をあわせて掲載する。

凡例

- ・ 発信年月日／発信地住所／差出人／宛名人（その他情報）
- ・ 促音、濁点等が不明確なものは読みやすいように適宜修正した。
- ・ 吹出し等による挿入は文内の正しい位置に記載し、で囲んだ。
- ・ 本人の書き間違い、誤植と思われる表記は、そのまま翻刻し、「ママ」を付した。削除が明らかかなものは記載しなかった。
- ・ 振り仮名については言葉のあとに「」で記載した。
- ・ 解読不能の文字は□で示し、確定できない文字は（カ）を傍注した。

一 宇野浩二差出織田作之助宛書簡【請求記号：織田文庫書簡二-59】

（差出し年不明）八月十八日／長野縣東筑摩郡島立村蛇原 岩間松雄方より／宇野浩二／大阪府南河内郡野田村丈六／織田作之助宛（封書 小山書店版原稿用紙 20×20 四〇〇字詰原稿用紙一枚両面 速達 四十銭）

ここに移りましてからもう一と月半ちかくなりますか、新聞はハイタツされませんし、ラディオ（荷風流）^{註1}は下のうちのがカスカに聞こえるだけですから、こんどの大事件を昨夜（七月十七日午後八時頃）^{ママ}はじめて知りました。◎七月二十七日づけのお手紙の中に「出口王仁三郎^{註2}曰く、昭和二十年八月二十日云々」とありましたが、王仁君のヨゲンが年月日をほとんど云ひ当てましたが、事実（好転）は反対にちかいですね。

◎ところで、いつか申し上げましたもの（随筆風の小説あるいは小説風の随筆）を「新文学」^{註3}のために書かうといよいよ思ひたちましたが、河原カンマン居士「ゴジ」^{註4}はイゼンとして、ウンともスンとも云つて来ませんので、河原居士につたへる前に、いつか申し上げましたやうに、あなたにお知らせいたします。ただし、この数日間ボクの大敵のアツサ

のために閉口してゐますので、これが心配です。せめて、夕方になって涼くなってからと思ひますが、これも大敵の蚊軍「ブンゲン」^{註5}。(蟲類にさされると非常な負ケ性「しやう」)がせめよせますので、この二つのために、二の足をふんでをります。

◎しかし、いづれにしましても、書いてみたいと思ひますので、河原カマン居士にメ切(ギリギリのところ)を聞いてやるつもりです。「新文学」の六月号が大阪特輯で、七月号が創作特輯といふことも、河原さんでなく、あなたから御教示されるくらゐですから。

◎唯今日^日は八月十八日ですから、六月号、七月号とガイネンがまったく分かりませんので、そんなことを考へずに、書き上げたら、送ることといたします。

※表・欄外 行外(カ)によってウラで失礼いたします

◎それについて 御面倒ですが、河原さんにおあひになりましたら、原稿ついたら、ついたといふ返事をすぐ速達で出し、原稿料のテハヒもすぐするよう、ゲンメイ下さいませんか。||先月(七月)十一日にカキトメソクタツで送ったのが、十四日についた、と半月ほどのちに通知し、「会計不在のため稿料は月末まで」にと書きながら、月末から十八日もたち

ますのに、まだ送ってきません。

◎内証(ナイシヨ)で申し上げますと、東京―松本のヤミノソウのために(話を)してたかもしれませんが(二十円ぐらゐ(これは僕の年頃としごろ) ||広津^{註6}、佐藤^{註7}、その他―先輩、北原(カ)^{註8}、室(カ)生^{註9}。その他には大金なのです)取られてしまったからであします^マ。

◎「新文学」は、こんな事になつても、つづけるつもりでせうか。||これも御聞かせ下さいませんか。

八月十八日

宇野浩二

織田作之助様

十日くらひ□□にまありますので(こんかい)よみかへしません。どうぞ^マ

【註】(1) ラディオ(荷風流)…永井荷風が『溼東綺譚』において使用した表記(隣家のラディオ) (2) 出口王仁三郎(でぐち・おにさぶろう) : 1871-1948 大本教の教主 (3) 「新文学」…全国書房刊行の文芸雑誌 (4) 河原カマン居士(コジ) : 河原義夫(全国書房「新文学」編集者)。カマンは緩慢、ゆったりしているのろいという意味、居士(コジ)は性格を表す語に付いて、そのような気質の男であることを表す言

葉。 (5) 蚊軍(ブンゴン)…蚊の大群 (6) 広津…広津和郎(ひろつ・かずお) 1891-1968 小説家・文芸評論家・翻訳家 明治期に活動した硯友社の小説家・広津柳浪の子 (7) 佐藤…佐藤春夫(さとう・はるお) 1892-1964 詩人・作家 (8) 北原と思われる…北原白秋(きはら・はくしゅう) 1885-1942 詩人・童謡作家・歌人 (9) 室生と思われる…室生犀星(むろう・さいせい) 1889-1962 詩人・小説家

【解説】

大阪府立中之島図書館所蔵、織田文庫第2期寄贈分に含まれる織田作之助宛宇野浩二差出書簡の内、昭和20年秋から昭和21年初春にわたって送られた3通をこれまで2回にわたって翻刻してきたが、今回取り上げたのはそれに先立つ8月終戦の時期に送られたと考えられる1通である。

封筒の消印からは差出年が判別できず、目録では「昭和」1年8月18日とされているが、差出人住所に書かれた「長野縣東筑摩郡島立村蛇原(じやばら)」から、宇野が長野県に疎開していた時期に該当する、昭和20年に書かれた書簡と推定することができる。『宇野浩二全集 第12巻』収録の年譜によると、宇野は昭和20年、息子・守道の勧めにより、長野県に疎開をしている。6月27日に疎開の為に東京を出発し、翌日から5日間、

松本在住の北沢喜代治宅に滞在。7月4日から「長野県東筑摩郡島立村蛇原(じやばら)」の百姓家岩間松雄の二階に住みついた」とある。『宇野浩二書簡集』収録の6月26日付織田作之助宛の書簡(織田文庫第1期書簡の部68)でも、松本郊外への疎開先の住所として本住所を通知している。宇野は同年11月23日に「松本市今町四百二十三番地の酒屋折井行江の離れ屋」を借りて移り住み、昭和23年にこの家を引き払い、東京に戻るまでこの地に暮らした。「ここに移りましてからもう一と月半ちかく」という冒頭文からも、本状は、宇野が蛇原に居住した五ヶ月弱の時期に送られた書簡であることがわかる。

本状の中で「七月二十七日づけのお手紙」と言及されている織田からの書簡は現時点では見つかっていない。

宇野が本格的に疎開準備を始めた6月末から8月までの書簡のやり取りは、次のようなものだったと考えられる。

- ① 昭和二十年六月二十六日／宇野↓織田 (書簡集173／織田1-68)
- ② 昭和二十年六月二十七日頃／織田↓宇野
※書簡③で宇野が「七枚ツツキ」書簡6月28日受取を言及。不明。
- ③ 昭和二十年七月七日／織田↓宇野
※書簡⑤で宇野が言及。

帰宅すると届くつたつたの(1)。

- ④ 昭和二十一年七月十一日／宇野↓織田 (書簡集 175／織田 1-70)
- ⑤ 昭和二十年七月十四日 (十六日消印)／宇野↓織田 (書簡集 176
／織田 1-71)
- ⑥ 昭和二十年七月二十五日／宇野↓織田 (書簡集 177／織田 1-72)
- ⑦ 昭和二十年七月二十七日／織田↓宇野
- ※書簡⑩及び本状(書簡⑫)で言及があるが不明
- ⑧ 昭和二十一年七月二十九日／宇野↓織田 (書簡集 178／織田 1-73)
- ⑨ 昭和二十年八月四日／宇野↓織田 (織田 1-74)
- ⑩ 昭和二十年八月五日(九日投函)／織田↓宇野
- ※書簡⑪中で、13日夕方に着と言及があるが不明
- ⑪ 昭和二十一年八月十日／宇野↓織田 (書簡集 179／織田 1-75)
- ⑫ 昭和二十年八月十五日／宇野↓織田 (書簡集 180／織田 1-76)
- ⑬ 昭和二十年八月十八日／宇野↓織田 ※本状(織田 259)
- ⑭ 昭和二十年八月二十日／織田↓宇野
- ※書簡⑮中で、宇野が書簡⑭と「ユキチガヒになった」と言及。不明。
- ⑮ 昭和二十年八月二十日(二十一日消印)／宇野↓織田 (書簡集 181
／織田 1-77)
- ⑯ 昭和二十年八月二十四日(二十五日消印)／宇野↓織田 (書簡集

182／織田 1-78)

- ⑰ 昭和二十一年八月二十七日／宇野↓織田 (書簡集 183／織田 1-79)
- ・「」は推定、 は宇野の書簡の内容から推定した織田差出書簡
- ・書簡集：『宇野浩二書簡集』、番号・書簡集における書簡番号
- ・織田：織田文庫、受入時期・書簡番号

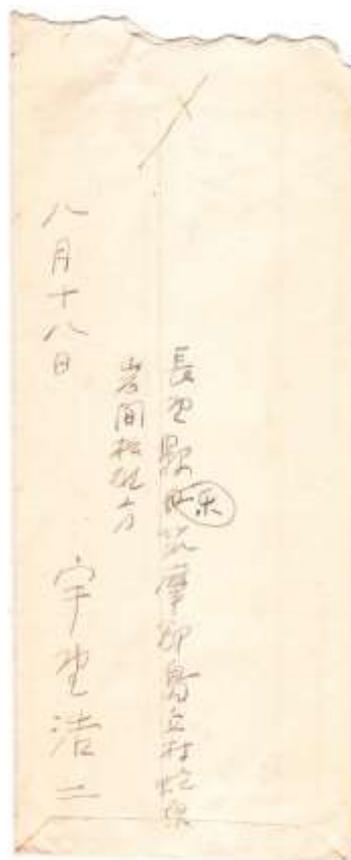
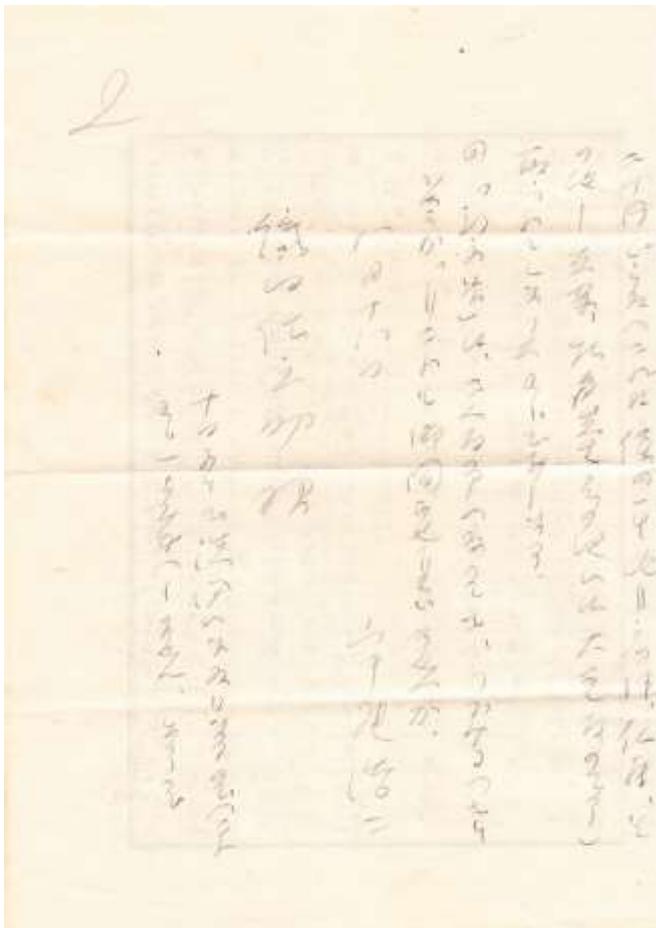
この時期、全国書房の雑誌『新文学』に関わる話題もあり、宇野と織田の間では前述のように相当の頻度で書簡がやり取りされている。互いの返事が行き違いになることもたびたびあったようである。

本状の内容は、疎開生活も落ち着き、終戦を迎えた頃の近況報告と、『新文学』創刊の進捗への苦慮で占められている。東京から離れた場所で、「新聞はハイタツされませんし、ラディオ(荷風流)は下のうちのがカスカに聞こえるだけで情報から隔離されおり、終戦という大事件を17日になってようやく知ったと伝えている。しかしラジオ嫌いで、近隣から聞こえるラジオの音に怒っていた永井荷風を揶揄して敢えて「ラディオ(荷風流)」と表記するなど、郊外での生活にもそれなりに慣れてきた様子も伝わる。織田からの「七月二十七日づけのお手紙」に書かれていたという出口王仁三郎の予言については、『定本織田作之助全集第8巻』の雑稿に収録されているエッセイ「終戦前後」に、「昭和二十年の八月二十日には、世界に大変動が来る。この変動は日本はじまって以来の大事

件となる」との予言として引用されている。その中で織田が「予言狂」と称した出口王仁三郎の言葉が終戦直前の民衆の間で、一つの希望のよう受け取られていた当時の空気がうかがわれる作品である。ちなみに、宇野は8月24日付の書簡内で、8月20日付の書簡に、自分も「出口王仁三郎」について一言書いたと記述しているが、書いている様子はない。『新文学』については、毎回書簡の中で、刊行への進捗や編集者たちの熱意への不信などを書き綴っているが、本状は、『新文学』に触れているあたりから、前半の近況の部分に比べて徐々に筆致が激しくなっており、当時の宇野の焦燥や怒りが伝わってくるものとなっている。

【調査に使用した資料】

- ・増田周子編『宇野浩二書簡集』（和泉書院 2000）
- ・宇野浩二著『宇野浩二全集 第12巻』（中央公論社 1969）
- ・『定本織田作之助全集第8巻』（文泉堂書店 1978）
- ・大谷晃一著『織田作之助…生き、愛し、書いた。（作家論叢書）』（沖積舎 1998.7）



織田作之助宛書簡（宇野浩二差出 8月18日）

【織田文庫・書簡Ⅱ・59】

弔 辞

昭和二十二年一月二十三日 杉山平一

謹んで織田作之助君の霊に告別の言葉をおくる

僕等が初めて逢つたのは、あれは昭和七年の頃、大阪劇場^{註1}の前で中谷^{註2}が一緒だった。君は三高^{註3}の生徒で、東京の佛文^{註4}へ行くといつていた。

僕は東京へ行つて待つたが、君は仲々来ず、やがていくらかの貯金を持つてやつて来た。学校をよして、文学へ背水の陣を君はしいたのだつた。それから僕等は同人雑誌^{註5}をしに、エルマアナア^{註6}で美少年の白崎^{註7}や太田道夫や青山^{註8}や吉井^{註9}や瀬川^{註10}と椅子にかけてゐたあの頃、ペリカン^{註11}の親父がポオの詩を訳し、背のたかいその妹がきれいな詩を書いてゐた頃、君は劇作を書き、やがて小説をかいた。その「俗臭」と武田麟太郎氏^{註12}がほめたと、それは僕等みんなの喜びだった。そして芥川賞の候補の活字を見た時どんなにうれしく、君に葉書をしたか、そして文芸推薦になつたときの寫眞が可笑しいといつてみんなに^マぎけたものだ。夫婦善哉をくさした批評が大学新聞に出て気にしてゐたきみ、あれからとつちゃん小僧から公表に追はれて、君はどん／＼成長した。大阪文学

に僕らをあつめ、戦争に行つてゐた中谷の小説「湖南戦線」^{註13}を走り廻つて本にしたり、瀬川の小説が映画になりそさうだといつては、我が事のように喜び、死んだ白崎の為に君は心から泣いた。君の「動物集」を正宗白鳥氏^{註14}がほめてゐたのが、僕等とんなにうれしかつたか、僕等織田作之助論を書いたが、君はすぐそれを越へて成長した。君は「二十才」を出し「五代友厚」を書き、講演もやり、「わが町」や「清流」を出した。其れを川島君^{註15}が監督して映画にした。其の頃君は奥さんを亡くし、此の映画を奥さんに見せ得なかつたといつて、君はかなしがつた。ラヂオドラマを書き、日本一のラヂオ作家だと僕等に自慢してゐたのに、それをきく奥さんはゐなかつた。君はかなしみをまぎらす様にやけに仕事をした。そしてえらく成つて行つた。君は手紙を書いて寄こした。「世相」を三好達治氏^{註16}がほめたと吉村さん^{註17}にきいたと「土曜夫人」は本當に一生懸命に書いてゐると、そして京都に家を買つたから移つたら昔の様に一緒に會はうと。そう云つて来たのに、其れが最後とは思はなかつた。僕等健康を心配してゐた。しかしそれを云ふと君が余り淋しさうな顔をするので僕等言へなかつた。僕は北国の田舎にゐて新聞できみの死を知つた。新聞の切抜を胸にしまつて、数日仕事を手につかなかつた。戦地から仲間が帰つてきたのに、大阪の町はもとの様にもつてきたのに、君はもう帰らない。君の愉快なおしゃべりや、突拍子もない思ひ付き、

僕等の希望であつた君を失つて、僕等どう生きて行けばいいのか。酷薄のこの冬の季節にもう逢へない君を想つてなんと言ふ淋しさだらう。頭を垂れて、たゞ君の安らかな睡りを祈る

織田君 さようなら

友人總代 杉山平一

三 (番外二) 弔辞 小野十三郎【請求記号：織田文庫―その他―12】

弔 辞

小野十三郎

弔辞 小野十三郎

織田君

君は死んだが

これから日本の小説は面白くなるかね

日本の作家の中で

一番大きな夢と計画を持っていた君が途中で倒れたことを僕は大変悲しいと思う。笑われそうだが僕も又人なみに君にかすになをいくらかの歳月をと思わないでもなかった

しかし君は立派だったよ。君は孤独で君の死は少し早すぎたが、死の時期は決してあやまつていなかった。

さとりすました作家や詩人たちの五十年六十年の隋勢ママ的な生涯ほど、君にとつて魅力なきものはなかったのだから

文学の貧困は權威に對する無自覚な傾倒からはじまると君は云つた。また今日の作家は生活の總決算は書くが生活の可能性は書かぬとも云つた。僕はこれらの言葉を長くいつまでも記憶するだらう

織田君 君は立派だった

俳句的リアリズムや短歌的リズムの残黨共は、相も変わらず君の背後で悪口のかぎりをつくしている。古ぼけた詩や日本的心境小説というやつもね。

しかし君は勝つたのだ。

君の死は少し早すぎたか

その時期は決してあやまつていなかった。僕も又君にならつて詩人としての終りのあやまたざることを願をう。作家 わが友 織田作之助 三十代の溔瀨たりし青春

君の靈よ やすらかに眠れ

昭和二十二年一月二十三日作

【註】(1) 大阪劇場：かつて千日前にあった劇場。1933(昭和8)年開

館。当初の名前は東洋劇場 (2) 中谷：中谷栄一(なかにたに・えい

いち) -2009 作家 (3) 三高：旧制第三高等学校(京都大学教養

部の前身) (4) 東京の佛文：東京大学フランス語フランス文学研

究室 (5) 同人雑誌：『海風』のこと (6) エルマアニア：「エル

マーナ」東京の喫茶店 (7) 白崎：白崎礼三(しらさき・れいぞ

う) 1914-1944 詩人 (8) 青山：青山光二(あおやま・こうじ)

1913-2008 小説家 (9) 吉井：吉井栄治(よし・えいじ) 1913-1990

のち朝日新聞記者 第23回直木賞候補 (10) 瀬川：瀬川健一郎(せ

がわ・けんいちろう) 大阪毎日新聞記者 (11) ペリカン：「ペリカ

ン・ランチルーム」東大前落第横丁にあったレストラン 後のペリ

カン書房 (12) 武田麟太郎氏：武田麟太郎(たけだ・りんたろう)

1904-1946 小説家 (13) 「湖南戦線」：中谷栄一著 輝文館 1943

(14) 正宗白鳥氏：正宗白鳥(まやむね・はくちよう) 1879-1962 小

説家・劇作家・文学評論家 (15) 川島君：川島雄三(かわしま・ゆ

うぞう) 1918-1963 映画監督 (16) 三好達治氏：三好達治(みよ

し・たつじ) 1900-1964 詩人・翻訳家・文芸評論家 (17) 吉村さ

ん：吉村正一郎(よしむら・しょういちろう) 1904-1977 フランス

文学者・文芸評論家・翻訳家

【解説】

昭和22年1月23日に大阪市内、楞嚴寺で営まれた織田作之助の葬儀に
おける、二人の詩人、杉山平一と小野十三郎による弔辞である。それぞ
れが織田作之助にとって大切な文学仲間だった。

杉山平一は、織田たち三高文芸出身者が創刊した同人誌『海風』に参
加して以来、終生の親友の一人だった。織田から杉山に送られた手紙も
多く残されており、この弔辞で触れられているエピソードも、その中に
いくつか書かれている。織田が最愛の妻・一枝を亡くしてから半年ほど
後に、杉山も我が子を亡くしている。その頃の織田からの書簡には大切
な人を失った悲しみへの共感の言葉が寄せられている。杉山が「君はか
なしみをまぎらす様にやけに仕事をした。」と言ったように、この後、織
田は作家としての仕事に没入していった。杉山は、三好達治らが主宰し
ていた同人誌『四季』に投稿、のち同人となり、詩人として認められて

いく。織田文庫に残る杉山から織田への昭和21年10月14日付書簡(織田文庫第1期書簡の部¹⁹²)では、三好達治が織田をほめていると杉山が報告しているが、弔辞で言及された織田からの最後の手紙にも「世相」の話術、三好達治がほめてくれた由、吉村正一郎氏にききました。」と書かれている。この手紙には弔辞にあるとおり、『土曜婦人』を一生懸命書いていること、『海風』を再建したいこと、京都の家で『海風』の仲間と会いたいことなど、将来への溢れんばかりの希望が書かれているが、織田の死によってその夢は叶わずに終わった。

小野十三郎は、アナキズム詩運動などに入り、独自の詩風を確立していた。昭和10年に全国のアナキスト一斉検挙があった際には、阿倍野署に留置されたが、12月処分保留のまま釈放されている。その後、昭和16年に『海風』など大阪七同人誌合同の話がまとまり、織田作之助、杉山平一らとともに、12月雑誌『大阪文学』を創刊した。小野は吉本興業の文芸部に所属し漫才作家・秋田實とも交友があった。そんな縁からか、『大阪文学』は、秋田が編集に関わる漫画雑誌『大阪パック』を発行している輝文館から発行される。輝文館には織田の先輩作家・藤沢桓夫や織田自身も頻繁に出入りしており、小野とも親交を深めた。織田の妻・一枝の葬儀にも小野は参列しており、昭和19年8月10日の織田の日記に「会葬の藤澤桓夫小野十三郎の両氏、そろって丸坊主にて口髭を生やし

給う。おかし。」と描写されている。続いて「われもまた先日より丸坊主ゆえ、両氏の驥尾に附して頭部の寂寞を口髭にて補うこととせば珍妙ならんと思えど、相談する相手今は亡し。」と織田らしい書きぶりで妻の死を嘆いている。小野は後に大阪文学学校を創設し、校長を務めた。現在も大阪の地で続く大阪文学学校は、田辺聖子、朝井まかて等多くの人気作家を輩出している。

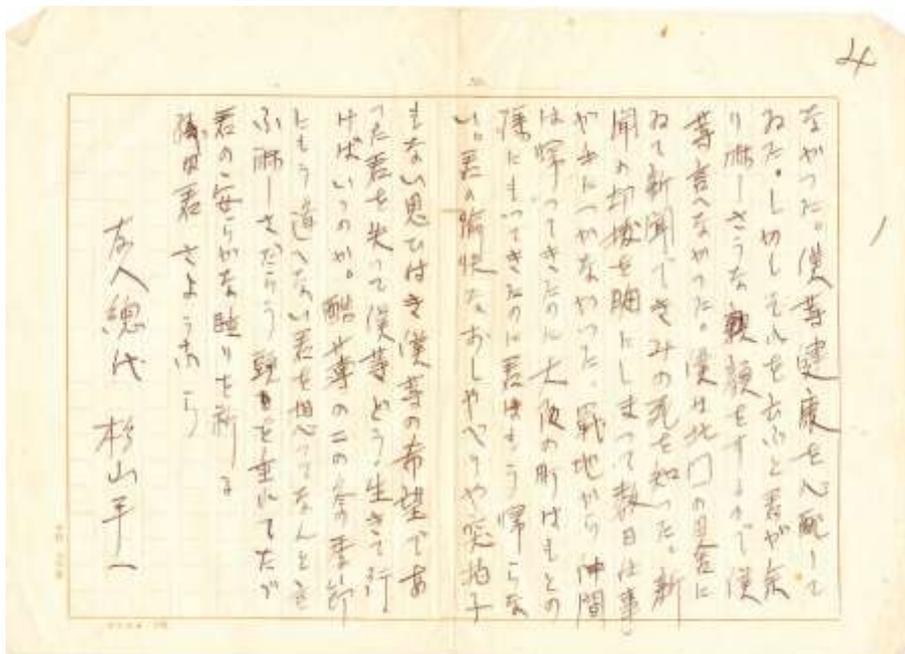
杉山・小野の両者とも『文学雑誌』掲載の「故織田作之助追悼」特集にもそれぞれ寄稿しており、この弔辞の内容をさらに深めたものになっている。抒情詩人・杉山平一は、織田との青春の日々を追憶し、アナキズム詩の洗礼を受けた小野十三郎は、織田の文学についての言葉を想い、その生き様を讃えた。織田作之助に関わった二人の詩人それぞれの雰囲気がよく表れた弔辞のように思われる。

【調査に使用した資料】

- ・日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第2巻 人名』(講談社 1977.11)
- ・日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第5巻 新聞・雑誌』(講談社 1977.11)
- ・日本近代文学会関西支部大阪近代文学事典編集委員会編『大阪近代文学事典 (和泉事典シリーズ)』(和泉書院 2005.5)

・『定本織田作之助全集第8巻』(文泉堂書店 1978)
 ・『近代作家追悼文集成 31 三宅雪嶺 武田麟太郎 織田作之助 幸田露
 伴 横光利一』(ゆまに書房 1997.1)

弔辞 (杉山平一)
 【織田文庫-その他II-9】



弔辞 (小野十三郎)
 【織田文庫-その他II-12】

